
ようこそ

朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつこそ

【Nコード】

N92050

【作者名】

朋次郎

【あらすじ】

よつこそ。題名通り也

気がつくとは私は、海の波の白く小さい水しぶきを絶え間なく浴びて横たわっていた。泡立ったしぶきとしぶきの合奏の中、一瞬のかすかな静けさがあり、その時は視界いっぱい大きな黒い岩が私に覆いかぶさっていた。またちらりと青くて高い空が見えたりする。私は海水のしょっぱさを全身に感じながらも、海水の冷たさは感じなかった。

「どうして私がここにいるの・・・」

私はそのままじっとして波の音を聞き、青いお空と黒い岩を見ていた。

「やあ、気がついたみたいだね、新しい人間だね」

かほそい陰気な声が私の身体の下の方から聞こえてきた。

声の主を見ようとして身体をずらそうとするが動けない。私は視線だけ物憂げに下に向ける。波と波の間に、やせて頬のこけた青白い男の顔が見えた。身体は見えない、首までだ。

「動けるかい、君？まだ動くにはちょっと無理かな、まだ来たばかりだしね・・・」

男の首はそうつぶやくと目を閉じた。

「しばらくそこにじっとしていたらいいよ。ここは暖かいから」

それから男はふうっと消えた。

「どうして、私がここにいるの？」

私はそう言おうとしたが声には出さなかった。そう、多分私は自分でここに来たのだから。

私はぼんやりとして視線を上に向ける。大きくて黒い岩が見える。鳥だろうか、ギャアギャアという泣き声がかすかに聞こえる。ああ、そうだ。ここは崖の下だ。確か私は崖の上にいた。でもどうしてそこにいたのかはわからない。

私は横たわった姿勢のまま手をあげた。両手をあげたつもりだ

つたが左手だけついてきた。私の左手は、甲からベロンと皮がめくられて骨が飛び出していた。ザクロのような肉の割れ目が見える。私は力なく左手をおろした。無気力な思考の中でそれでも私は考える波にそつと揺すられながら。

ああ、そうだった。私は崖から、あの黒い岩の上から飛び込んで、でもなんで飛び込んだったのかしら・・・？よく思い出せない。

これだけははっきりわかる。

私は死んだのだ。私は飛び込んでこの崖の下、岩にたたきつけられて。

死んだ。

私は考えるのをやめて目を閉じ、しばらくじっとしていた。不安はない。ただ何かから解放されたような自由な気分だった。でもそれは爽快とはちよつと言ひ難い。

「はあい、新入りさん！」

だしぬけに元気な女性の声がした。目を開くと上空に血だらけになった20代前半位の女の子がいた。彼女のすぐ横には右目のつぶれた若い男性がいた。二人ともにここにこしている。

女の子の方が言った。

「どうしてここに来たの」

「どうしてって・・・崖の上から飛び込んだのよ。でもどうしてそうしたのか自分でもよくわからないのよね・・・」

私は自分に言い聞かせるように返事した。

「あー忘れてしまったのね。あたし、あんたの顔を見て多分そうじゃないかと思ったの。だってあんまり苦しそうじゃないし、ちよつとぼんやりしているからね」

女の子はそこで言葉をとぎらし、「よほどつらいことがあったのね」と小さい声で言った。

私はそうかもね、と軽くうなづく。そして全部忘れていたみたい

でよかったと思った。爽快ではないが、自由な気分はそこからきているみたいだった。

彼女はじっとしている私を見下ろして満足げにうなづいた。

「ここは居心地の良い場所よ。あたし達は心中なの。あたし達の身体はこの崖沿いに30メートルほど入った海底に沈んでいる。両手両足でお互いできつく縛り、薬を飲んだ後二人で飛び込んだの。そりゃあ、苦しかった。たかが結婚を反対されたくらいで軽く死んじやったりして。あたし達は薄暗い海の底で心中を選んだことを後悔して何度ケンカしたかわかりやしない。でもいくらケンカしたってもう生き返りはできない。で、明るく暮らすことにしたの。あんたも少しは死んだことを後悔するだろうけど、何、すぐに慣れるよ。ふふふ、あれからもう30年もここにいるの」

恋人達の死んだ当時のままらしい血だらけの顔を良く見ると若々しい。

「死んでから30年。年をとらないみたいね、私もそうなるのかしら・・・」

私がそういうと、女の子は気の毒そうな顔つきになった。

「まあ、年はとらないみたいだけど。亡骸の方は変わるよ。あたしの魂は・・・ホラあんたが今あたしを見ているのがあたしの魂よ。死んだままの若いけど血だらけの・・・亡骸の方はもう完全な白骨死体よ。あんたが自由に魂を飛ばせるようになったら観にいらっしやいな」

私は身体がここにあつて、魂だけが飛ばせてどこにでも行けるようになれるのかなあ、と思いながらあいまいにうなづく。女の子は話を続けた。

「でも、あんたはかわいそう。まだ自分で自分を観れないようだから教えてあげる。あんたの顎から下はねえ。粉々に砕かれている。はつきりいつて、もう顎はないよ。どうやら顔から飛び込んだみたいね。で、どっかの岩に最初に勢いよくがーんとぶつかってそれから、身体が反転してこの岩にきたんだ。あんたの背中に岩の先が

ささつて、腰から下はその岩と岩の間にがっちりハマって動けなくなっているね」

私はかろうじて動く左手で自分の顔をさわった。確かに顎と思しきあたりが存在しなかった。でもショックは感じない。再び女の子にぼんやりとした目を向けるとしゃべりだした。

「あたしだって魂血だらけ、本体ガイコツ、で見られたもんじゃないけど、ここは容姿なんて関係ない世界だしね。じゃあ、また気が向いたらまた来てあげる。自分のことを思い出したら教えてね。でもあんたが前の世界・生きていた世界に未練がないようであつた。一度事故で崖から落ちてここに来た人がいたけど、悲惨だったもの。あたし達がどんなに慰めても自分が死んだことがわからないのか、わかりたくないのかおいおい泣くばかりでさ。1週間たつて死体が回収されお坊さんがここまでお経をあげにきてやつと消えてくれたんだよね。ああ、それまでどんなにうるさかったことが。じゃ、またね。あたし達、身体のあるところに戻るね。ガイコツでも大事なあたし達の身体だもん！」

女の子はしゃべるだけしゃべると、男の人とパツと消えた。

「ねえ、いつから身体から離れて魂を自由に飛ばせるようになるの」私は問いかけたが遅かった。私は波の音を聞き、岩を見つめてぼんやりとしていた。そうしていると今度は、上手の方から声が聞こえた。そこにはどろんとした目の中年の男が私を見下ろす。男は言った。

「あんた、その身体。誰か引き取りに来るかね」

私はしばらく考えたが誰も来ないような気がするとつぶやいた。男はそんな私を見て

「ああ、あんた生きていたころの記憶、あんまりないようだね。よかったね。そんなに苦しくないだろう。すぐに魂だって飛ばせるよ。ほら、もうすでに首と左手が動かせるし」

「おじさんはどうしたの」

「わしゃあ、溺死だよ。2年前に釣り船から落ちてなあ、まったく台風の近付いている日にや船を出すもんじゃないよ。あちこちの海をさまよい、ここにやっと流れ着いたが誰も死体を引き取りにきてくれないんじゃない。わしゃ子供が4人、孫が6人もいるのに、浮かばれないよな」

男はため息をついた。

「みんな探しているだろうか・今でも海水をたっぷり飲んだ腹が苦しいんだ。すぐくつらくてたまらんよ。あの心中カップルのようになあつけらかんとした気分にはとてもなれんよ。あんたもまあ、よく見ればまだ若いしかわいい顔をしていたのだろうに何を好きこのんで死んだのかね。顎をはじめ身体全体傷だらけでひどい状態だよ」
言うだけ言うと男は目と口をゆっくり閉じた。すると輪郭がぼやけすうーっという感じで消えてしまった。

私は再び一人になり、ゆっくりと自分について考えようとした。やはり記憶ははっきりしなかった。無いに等しい記憶だった。私は生きたくなかったのだ。それほどつらい人生だったのかしら、でも生きているってどういう状態だったのだろうか。ああ、私にはそれすら思い出せない・・・。

また人の気配がしたので目を開けると今度は最初に見た頬のこけた男性だった。

「みんな君が珍しいのでよってくるみたいだな」

男はぽつりと言ったが少し迷惑そうな表情だった。

「一体ここには何人の人がいるの？」

「知らない。新しい死人を観る趣味のないヤツやしゃべりたくないヤツは絶対にうごかないからな。もちろん私もその中の一人だがねあのカップルが来るのが分かっていたんですぐに身を隠したんだ」

「あなたは人嫌いなだね。でもそれにしてもよく来るじゃないの。あなたが来たの、2回目よ」

男は腹立だしげに言った。

「そりやそうだ。君は私と全く同じ死に方してるんだ。あの崖から飛び込んで最初に衝突した岩まで同じだ。私は40年前からここにいる。その上に君が来たものだから少々重たくて不愉快なんだがね」
「えっ、私、あなたの上にいるの」

「いるさ、上や横から見たくらいではわからないが、君の肉のついた身体の下に私の骸骨がある。君にや痛いとか苦しいとかの感覚がないようだから、文句言っちゃってしょうがないがね……。でもそのうち君が完全な白骨死体になったら、私の白骨と重なり合ってるで心中のように見えるだろうよ」

「……すみません。知っていたらここに来なかったでしょうけれど、どうしましょうか」

「いいよ、別に。だがこの年になって女性と出会えるとは思わなかったがね。はっはっは、まあ、しばらくは我慢しよう」

男は初めて笑った。そして話を続けた。

「君の身体は岩にはさまっているが、もう少し経てば肉が溶けて骨が見える。そしたら、波の荒いときにどこかへ移動するだろう。私のようにろっ骨まで岩の先が貫通していかないからね。それまでの仲だ。本当は、私は私でじつとしていたいのだがね」

私はこの男の死体の上になっているといわれてもぴんとこなかった。何の感情もわいてこない。ああ、そうなの……。ふうん、という感じ。「死」と同時に心の何かをも亡くしたのはわかった。

やがて空は夕焼けになり、すぐに星の瞬く夜になった。私はぼんやりしていたが、ふと思いついて首だけぐるんと後ろに向けた。

「ねえ……。下にいる男の人……」

「話しかけるのは、やめてくれないか……」

「私何もかも、みんな、忘れきってここに来たみたいなの。ごめんなさい……。1つだけ教えてくださいな」

「1つだけならいいよ、どうぞ……」

「私、ずっとここにいるのよね……。どこへも行かないよね」

「そうだよ・・・この崖の下にある身体は動くといっても海流の関係で遠くへは移動しないよ。あ・・・もしかしてそういう意味でなくて、昇天したくて聞いているのか？昇天できるのなら、ここにいるのもそう永くはないだろう。君のように生前の記憶がないならかえって昇天しやすいよ。どうやるのかは私は知らないし、知りたくないがね。ここに来た何人かは神仏の助けなしに1人で消えたよ。死体だけあって魂の見えないのがそれだ。君もそうしたければ、するがよい」

その言葉を聞いてふいに私は怖くなった。

「私・・・昇天なんてしたくないわ。よくわからないけれど、昇天なんかしたくない」

「そうか・・・じゃあ、ここに好きなだけいるとよい。ここは、暖かい。ようこそ、君。崖の下の国へ。なあに、じきに慣れるよ。もう少ししたら魂を飛ばせるし、欲を出しさえしなければ、ここはとても温かい。とても良いところだ」

わたしはうなづくとおんやりとした頭のまま、波しぶきのしよっぱさを全身に浴びつつ、うつとりと目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9205o/>

ようこそ

2010年11月21日21時25分発行